

沖縄県におけるダークツーリズム

一 戸 信 哉

はじめに

本稿は、「ダークツーリズム」の観点から、沖縄観光の可能性を分析することを目的とする。沖縄県は、太平洋戦争末期に住民を巻き込んだ日米の地上戦「沖縄戦」が行われ、沖縄県民の約4人に1人が亡くなったとされる場所であり、米軍統治下での慰霊団訪問から始まり、その後の修学旅行での「平和学習」まで、この地の「悲しみの歴史」は、観光と結びついてきた。

2022年は、沖縄の日本復帰から50年の節目とされ、関連の報道などが多く見られた。沖縄の地方紙、琉球新報と沖縄タイムスはそれぞれ連載特集を組み、「復帰半世紀 私と沖縄（ウチナー）」「世替わりモノ語り」（琉球新報）、「沖縄の生活史～語り、聞く復帰50年」（沖縄タイムス）といったシリーズが続いている¹⁾。NHKでは、沖縄放送局が「沖縄 本土復帰50年 つなぐ未来へ」とするシリーズをスタートさせ、2021年5月の集中編成を皮切りに、過去に制作された番組を含めて、特集番組を多数放送している²⁾。これらの番組は、沖縄放送局以外のNHK放送局でも、一部が放送された。同様の動きは民放でも見られており、民放連が運営するウェブサイト「民放オンライン」の中で、「沖縄民放からみる『本土復帰50年』」という特集が組まれている³⁾。テレビ番組としては、琉球朝日放送が「復帰50の物語」、琉球放送が「沖縄本土復帰50年シリーズ『HOPE50』」、沖縄テレビ放送が「復帰50年未来へ オキナワ・沖縄・OKINAWA」と題するシリーズをそれぞれに組み、放送している⁴⁾。

歴史をさらに遡れば、薩摩藩の侵攻に端を発する、清と薩摩・徳川幕府との二重外交、その後の「琉球処分」といった歴史、その後も続いた沖縄県人への差別、本土・海外への移民といった、さまざまな苦難の歴史があり、また日本復帰後の米軍基地の問題は現在にまで連なっていることを考えると、沖縄は、「ダークツーリズム」に通じるさまざまな要素が、重層的に見られる地域であるとも考えられる。ただその一方で、1980年前後に始まる、リゾート地としてのプロモーションや、沖縄出身アーティストのメディアでの活躍といった複合的な要因により、沖縄観光における「光」の部分も拡大し、2018年度には入域観光客数が1000万人を突破しているこ

とも注目すべきだろう。

沖縄がたどったこれらの歴史については、他県に比べても研究が質・量とも多く、観光情報そのものも、「光」の部分を中心に、一方で「平和学習」への関心も高いことから、多様なコンテンツが提供されてきている。本稿はこうしたコンテクストを踏まえつつ、いくつかの視点で沖縄のダークツーリズムの現状と可能性について、検討を加えるものである。具体的には、まず、沖縄観光の概況を述べた上で、2022年9月に沖縄で実施した調査取材活動をベースとしつつ、1)「琉球処分」以後、2)移民と沖縄、3)沖縄戦、4)「戦後」の4つのポイントについて検討を加える。「移民」以外は時系列となっているが、沖縄からの移民は、20世紀初頭から、戦後まで続き、現在も「世界のウチナーンチュ」のネットワークが提唱されているという点を踏まえて、独立した項目とした。

1. 沖縄県の観光の概況

沖縄県文化観光スポーツ部観光政策課がまとめた「平成30年度沖縄県入域観光客統計概況」では、平成30年度の入域観光客数は1,000万4,300人で、「前年度比で42万4,400人、率にして4.4%の増加」となり、「6年連続で過去最高を更新」したとしている。その原因として沖縄県は、離島直行便の拡充などで国内客が増加したこと、海外航空路線の拡充・クルーズ船寄港回数の増加によって、外国からの観光客が増加したことなどをあげている。

この状況は2020年3月からの新型コロナウイルスの感染拡大により一変し、本校執筆時においても、回復への道筋は見通せない状況となっている。2022年7月、沖縄県は第6次沖縄県観光振興基本計画を策定し、「世界から選ばれる持続可能な観光地」というビジョンを掲げている。世界自然遺産に登録された「沖縄島北部及び西表島」、世界文化遺産である首里城を始めとする「琉球王国のグスク及び関連遺産群」、琉球料理、泡盛、空手、組踊など独自の歴史文化などを生かした「体験」により、国内外の旅行者に選ばれることを目指すものである。同時に、環境保護や観光業従事者の質の高い暮らしも意識しているというのが、「持続可能」の意味するところである。ダークツーリズムに関しては、「その土地ならではの自然・歴史・文化を保全、活用した体験型観光を促進しつつ、社会・経済・環境の三側面においてバランス」をとるという言及があり、これらの要素の中に、沖縄の歩んできた「悲しみの歴史」の蓄積もまた、位置づけられると考えられる。

2. 「琉球処分」と沖縄

明治政府と沖縄との関わりは、1871年の廃藩置県に始まる。廃藩置県により、薩摩藩が鹿児島県となった結果、翌1872年に、国王尚泰が琉球藩王となることが明治天皇によって「冊封」される。これにより、琉球の独立性は一定程度確保されるかにみえたが、1879年、軍隊・警官を率いて処分官の松田道之が派遣され、首里城の明け渡しと尚泰の上京が命じられる。4月4日には、琉球藩の廃止と沖縄県設置が布告されている⁵⁾。

こののちも、王府士族の中には、清に亡命して救国運動を行うものもあり、日清間の交渉も行われ、一時は宮古八重山を清国領とする妥協案も検討された。最終的には、日清戦争の終結により、宮古八重山を含めて日本領となることが確定している。

琉球を沖縄県として領土に編入することには、明治政府内でも議論があったが、最終的には軍事的な考慮、すなわち、欧米列強が琉球を占領すれば、有力な軍事基地を彼らに与えることになる、という危機感が、最終的に明治政府を「琉球処分」に踏み切らせたと見られている⁶⁾。

2-1. ペリー提督上陸記念碑

欧米列強の琉球進出については、1850年前後にその兆しを見ることができののだが、もっとも知られているのが、米国のペリー艦隊の琉球上陸である。1853年6月6日、琉球王朝時代の首里城に入城した日を刻む記念碑が、那覇市内泊地区に設置されている⁷⁾。米国は翌年、琉球王国と「琉球修好条約」を結んでいる。

2-2. 臺灣遭害者之墓

那覇市内中心部、波上宮にほどちかい護国寺に、「臺灣遭害者之墓」という石碑が設置されている(写真1)。

1871年10月、宮古島の島民を乗せた船が暴風で遭難、台湾南部に漂着した。現地に上陸した人々が、現地のパイワン族に殺害されるという事件が起きている。このときに犠牲になった人々の墓として設置されたのが、この墓ということになる。この事件の呼称はさまざまであるが、台湾ではパイワン族の村の名前をとって、牡丹社事件とも呼ばれている。



写真1 臺灣遭害者之墓

当時、日本政府内では、琉球の最終的な統治形

態について方針が定まっていなかったが、この事件を契機として、日本政府は宮古の島民を「日本人」であるとして、1874年、その保護のために出兵、パイワン族牡丹社の関係者を多く捕えて殺害している⁸⁾。1870年代前半、琉球の帰属をめぐる日清関係は摩擦を抱えていたが、この事件は日本政府が宮古・琉球の人々に対して「保護権」を行使することにより、日本による琉球の領有を既成事実化する狙いがあったものと考えられる。

2022年9月の筆者訪問時には、墓石の文字も読みにくくなっていたが、那覇市教育委員会が設置した案内板があり、ある程度の理解が得られるようになっていた。護国寺には、ペリー艦隊の来訪前に、英国人宣教師・医師ベッテルハイムが滞在し、医療伝道活動を行っていたため、「ベッテルハイム記念碑」が設置されており、周辺には、後述する対馬丸事件の慰霊碑である「小桜の塔」などもある。

2-3. 人頭税関連史跡

「琉球処分」以後の明治政府の沖縄への対処方針の柱は、旧慣温存であった。不満を持つ王府士族を懐柔し、新たな統治への動揺を緩和するため、王国時代の法制度や慣習が維持された。特に宮古八重山では、過酷な人頭税制度が維持された結果、多くの島民が長く重税に苦しみつづけることになった。宮古八重山の人頭税の実情について、笹森儀助が著書「南島探検」で詳しく紹介したほか、中村十作らが帝国議会への請願を行い、廃止にこぎつけたとされている。

宮古島市平良には「人頭税石」といわれる石が残っており、「身長が石の高さになると人頭税が課される」という伝説がある⁹⁾。また、石垣市立八重山博物館には、人頭税廃止百年記念の碑が建てられている。このほか、竹富島、与那国島にも同様の記念碑が建てられている。

人頭税廃止に尽力した人物として、のちに新潟県上越市でも顕彰されるようになったのが、同市板倉区出身の中村十作である。1867年に生まれた中村は、真珠の養殖を行うために訪れた宮古島で、重税に苦しむ人々の現実に関わり、製糖技術者城間正安、同じく新潟出身で新聞記者であった増田義一らと協力し、宮古島の惨状を本土の世論に訴えている。中村の働きは、戦後になって板倉区稲増の地元でも知られるようになり、2005年に中村十作記念館¹⁰⁾が作られるとともに、宮古島との交流が続けられている。

3. 移民と沖縄¹¹⁾

沖縄からの移民の始まりは、1899年とされているが、このタイミングに

は、日本政府による旧慣温存政策の終焉が、少なからず関連している。1899年から1903年にかけて行われた土地整理事業により、個人の土地所有権が確立された結果、土地を処分して海外に出稼ぎに出ることが可能になった。同時に沖縄県は、過剰人口を海外に送り出すとともに、移民先からの送金も期待して、移民政策を推進した。移民先は当初ハワイから始まったが、その後南米、北米などに広がっていった。第一次世界大戦で、ヨーロッパの砂糖生産が壊滅的な状態に陥る中で、沖縄の黒糖価格が高騰したが、戦争終結後の反動が大きく、経済的に追い込まれた沖縄の人々の関西・関東への出稼ぎが増えるとともに、ハワイや南米、さらには南洋群島への移民も増加している¹²⁾。

沖縄戦で疲弊した戦後にも、再び移民の動きが広まっていく。米軍統治下においても、琉球政府は1954年に最初の計画移民をボリビアへ278人送り出し、その後も各地への送り出しが続いていった。

2022年の筆者の沖縄訪問時には、図書館、博物館などの公共施設において、移民の歴史に関わる展示が行われていた。たとえば、沖縄県立図書館では、「移民資料コーナー」が常設されるとともに、世界各国への移民についてのパネル展示と関連図書紹介が見られた。同図書館では、「沖縄県系移民一世ルーツ調査・相談サービス」を実施している¹³⁾。

沖縄県が主催して、世界各国で暮らす沖縄県系人とのネットワークを拡大・発展させることを目的としたイベントに、世界のウチナーンチュ大会がある。1990年の第1回大会からおおむね5年ごとに開催され、2022年10月に第7回大会の開催が予定されている。

こうした沖縄県からの海外移民の歴史の中から、2022年9月の訪問では、移民の父と呼ばれた當山久三と、戦後沖縄救済に尽力した比嘉太郎について、現地での調査を実施した。

3-1. 「移民の父」當山久三と當山記念館

沖縄本島中央部東海岸の、国頭郡金武町は、米海兵隊キャンプ・ハンセンの敷地が、町の総面積の60%を占めている。この町は、沖縄県の中でも、先駆けて移民を送り出した町としても、知られている。金武町で、先頭にたって移民推進運動を展開した人物が「移民の父」當山久三（1868-1910）である。現在、町役場近くに當山記念館と、銅像が設置されている（写真2）。當山は1899年に最初のハワイ移民を送り出したのち、4年後の1903年には自ら引率してハワイに渡り、アメリカやハワイに多数の移民を送り出している。

當山記念館は、1935年に建設された鉄筋コンクリートの建物で、海外移民からの寄付金により建てられたものである（写真3）。館内では、當山久三の呼びかけから始まった海外移民が、世界各地にどのように広まっていったかが展示されている。建物は、2016年に建築当初の姿に復元され、2021年に登録有形文化財となっている。2022年9月の筆者訪問時は、平日で悪天候だったこともあり、ほかの来訪者はいなかった。



写真2 當山久三銅像



写真3 當山記念館

3-2. 比嘉トーマス太郎と「海から豚がやってきた」記念碑

ハワイ移民2世で、沖縄戦に米軍兵として従軍するとともに、その後の沖縄救済運動にも関わった人物に、比嘉トーマス太郎がいる。比嘉トーマス太郎に関する史跡はないが、比嘉に関係した記念碑として、「海から豚がやってきた」記念碑がある。比嘉は1916年ホノルルに生まれ、日本の教育を受けるために北中城村で祖父母と暮らした後、大阪の紡績工場での出稼ぎを経験し、最終的に太平洋戦争前に米国に戻っている。沖縄戦に従軍した比嘉は、他の帰還兵や通訳兵とともに沖縄の惨状を日系人たちに伝え、「島に人影なくフル（昔の豚小屋）に豚なし」と語ったとされている。比嘉らの呼びかけに応じた人々により募金が集まり、「布哇連合沖縄救済会」は生きた豚をアメリカから沖縄まで、28日かけて船で運び、うるま市のホワイトビーチから陸揚げしたという。

このエピソードは、下嶋哲郎が「豚と沖縄独立」（未来社、1997年）「海から豚がやってきた」（くもん出版、1995年）で紹介したことで、広く知られるようになり、ホワイトビーチがあるうるま市に、「海から豚がやってきた」記念碑が建立された。

比嘉トーマス太郎は、元沖縄県知事の大田昌秀と親交があったことから、比嘉の書き残した文書の多くが、沖縄県公文書館に保管されているほ

か、1969年に比嘉自身が制作したドキュメンタリー映画「ハワイに生きる」も所蔵されている。2022年9月の公文書館訪問時には、「ハワイに生きる」を視聴することができた。映像は、沖縄からのハワイ移民が始まって65年を記念して制作された内容で、厳しい農作業に従事しながら生活基盤を築いていった一世の生活を描くところから始まり、徐々にハワイ各島のさまざまな業種で活躍する、当時の沖縄県出身者の姿を捉えるものとして展開している。

4. 沖縄戦と関連遺構

1945年3月26日、慶良間諸島への上陸に始まる米軍の上陸作戦は、4月1日、嘉手納町から読谷村にかけての海岸への上陸で、本島でも開始される。その後各地で繰り広げられた激戦から、5月下旬の首里陥落を経て、南部で多くの犠牲を出し、6月23日に組織的戦闘が終結したとされる。その間、「軍官民共生共死」の方針により、県民の多くが戦時動員を受け、軍と一体となって危険な業務に従事したほか、軍民が共存する壕の中で、多くの悲劇が生まれている。本島をはじめ、多くの島々が戦争に巻き込まれた沖縄県には、いまなお収集されていない多くの遺骨が残されており、被害の全貌も十分には分かっていない。

沖縄戦については、上陸した米軍の撮影した映像が多数残されており、これらを用いつつ、沖縄戦体験者の証言を交えたドキュメンタリーが、多数制作されている。戦後70年の2015年6月には、NHKスペシャル「沖縄戦全記録」が放送されている。さらに、2020年8月2日には、NHKスペシャル「沖縄“出口なき”戦場～最後の1か月で何が～」が放送されている。

吉浜忍「沖縄の戦争遺跡 <記憶>を未来につなげる」（吉川弘文館、2017年）では、多数ある沖縄の戦争遺跡の中から、150近くをリストアップし、紹介している。本稿は、2022年9月の現地調査をベースにしつつ、これら多数ある遺構からいくつかを挙げて、検討を試みる。

4-1. 慶良間チージ（シュガーローフ）

沖縄戦の激戦地のひとつ、米軍が「シュガーローフ」と呼んだ丘陵地帯は、現在安里配水池の敷地となり、周辺に高層ビルが立ち並ぶ「那覇新都心」と呼ばれるエリアの中にある。

沖縄戦においては、日本軍はここを首里防衛の要衝としたため、日米で激しい攻防戦が繰り返された場所である¹⁴⁾。

2022年9月の筆者訪問では、英語と日本語で書かれた案内板と、木製の卒塔婆が建てられているだけであった(写真4、5)。近隣には沖縄県立博物館・美術館が2007年にオープンしており、博物館訪問の際に訪問するという事も可能である。



写真4 シュガーローフ案内板



写真5 シュガーローフの卒塔婆

4-2. 対馬丸記念館

1944年8月22日、那覇から九州に向かっていた疎開船「対馬丸」が、米潜水艦の魚雷によって攻撃され沈没、乗員乗客1,788名のうちの多くが死亡した。この対馬丸事件¹⁵⁾を記念して、那覇市内中心部に作られたのが、対馬丸記念館である(写真6)¹⁶⁾。近くの旭ヶ丘公園には、犠牲者を慰霊する「小桜の塔」が設置されている(写真7)。対馬丸の犠牲者のうち、800人程度が小学生だったと言われている。

この事件については、情報統制のために「箝口令」がしかれたため、生存者もまた、詳しい事情を長らく語ることができなかった。2022年、記念館を訪問した際には、兄が弟の安否を弟の友人(別の船で疎開したものと思われる)にたずねる手紙が掲示されており、弟の友人が(もし沈没したという事実を知っていても)語ることができなかった状況を、暗示していた。

記念館は、沖縄市内中心部にあり、波の上ビーチから近く、短期滞在者



写真6 対馬丸記念館



写真7 小桜の塔

でもアクセスしやすい。対馬丸事件は、沖縄からの住民避難がいかに難しかったかを表すものであり、南西諸島を含めた国際関係に関心が集まる今日、住民避難や疎開の難しさを考える素材を提供している。

4-3. ひめゆり平和祈念資料館

沖縄本島南部糸満市にあり、沖縄戦に巻き込まれた「ひめゆり学徒隊」の戦争体験を伝えるミュージアムが、ひめゆり平和祈念資料館である。「ひめゆり学徒隊」は、沖縄陸軍病院に動員された沖縄師範学校女子部・沖縄県立第一高等女学校の生徒たちで構成されていた。動員された教師・学徒240人中136人が亡くなっている。生き残った元生徒たちが作る、財団法人沖縄県女師・一高女ひめゆり同窓会が、資料館の設置主体となった。

1946年4月、沖縄陸軍病院第三外科が置かれた壕の跡に慰霊碑「ひめゆりの塔」が設置された¹⁷⁾が、この塔に隣接する形で、1989年に資料館が設置されている。

ひめゆり平和祈念資料館は、沖縄への修学旅行の主要な訪問先となってきたが、2004年4月、全面的な展示改装を行った。さらに、戦後75年が経過し、訪問する生徒から見た現実感が乏しくなったという問題意識から、展示の刷新が計画され、2021年4月にリニューアルオープンしている。「戦争からさらに遠くなった世代へ」をテーマとして、イラストをとり入れ、写真を選び直すといった試みが行われている。写真については、従来クラスごとで撮られた集合写真が使われていたが、生徒たちが笑顔で写っているグループ写真を採用するなど、現代の若者に親近感をもたせることを意図した改変も行われている¹⁸⁾。

1975年7月、皇太子明仁親王（当時）及び同妃が、ひめゆりの塔を訪問した際には、洞窟内に潜伏していた者が、火炎瓶を投げこみ、献花台を炎上させた事件が起きている（ひめゆりの塔事件¹⁹⁾）。

4-4. 沖縄県営平和祈念公園

沖縄本島南部の糸満市摩文仁の丘をのぞむ台地に平和祈念資料館、「平和の礎」などが設置されている平和祈念公園がある。昭和53年に設置された。この地域は、沖縄戦最後の激戦地であることから、昭和40年琉球政府により沖縄戦跡政府立公園の指定を受けている。

公園の中には、沖縄戦に関連した展示を行っている平和祈念資料館があるほか、沖縄戦の犠牲者の名を刻んだ「平和の礎」、「平和祈念像」、国立沖縄戦没者墓苑がある。また、府県や団体の慰霊塔が50基建立されている

る。

「平和の礎」には、沖縄戦で犠牲になったすべての戦没者の名前を、敵・味方、軍人・民間人、国籍の区別なく、刻銘している。沖縄出身者については、満州事変に始まる十五年戦争の期間内に戦争が原因で死亡した者など、より広い範囲が刻銘対象となっている。

公園内に設置された慰霊塔のうち、府県ごとに設置されたものを除いて、特徴的なものを以下に挙げる。

4-4-1. 韓国人慰霊塔

平和記念資料館の近くに、韓国人慰霊塔建立委員会によって設置された石塚が設置されている。沖縄に、「徴兵、徴用として動員された1万余名」を慰霊するものとして設置されている。「平和の礎」に刻まれた韓国・朝鮮人は、2022年6月の時点で、大韓民国382人、北朝鮮82人となっており、慰霊塔に刻まれた概数と名前が刻まれた人の数とのギャップは、非常に大きい。

4-4-2. 島守之塔

沖縄県知事島田穀と沖縄県職員の慰霊塔として、1951年に設置されたのが、島守之塔である。戦争末期に沖縄県知事に就任した島田は、疎開の促進、自ら台湾に飛んでの米の確保などで成果を挙げたが、米軍上陸後は住民を守ることができないまま、摩文仁の壕を最後に、荒井退造警察部長とともに、消息をたっている。近年、住民保護に尽力した島田の再評価が進み、2015年、那覇市内の奥武山公園に建立された。また、2021年には、ドキュメンタリー映画「生きろ 島田穀一戦中最後の沖縄県知事」（佐古忠彦監督）、2022年には映画「島守の塔」（五十嵐匠監督）が公開されている。

4-4-3. 黎明之塔

旧日本軍第32軍司令官牛島満中将と参謀長長勇中将の慰霊塔である「黎明之塔」も、平和祈念公園内に設置されている。1952年に、木柱の墓標が設置されたあと、1962年10月南方同胞援護会の助成により現在の慰霊塔に改修された。

第32軍が首里から南部への撤退を選択し、徹底抗戦を選択したことにより、沖縄の住民の犠牲が拡大したことからみて、沖縄県民の軍司令部関係者への思いは複雑なものがある。2004年から継続されていた、6月23日未

明の陸上自衛隊第15旅団幹部による「黎明之塔」参拝について、2022年は実施されなかったという点が、沖縄のメディアによって報道されている²⁰⁾。

4-4-4. 樺太の碑

平和祈念公園内を中心に、このエリア一带には、各県の沖縄戦戦没者の慰霊碑が建てられているが、その中にひっそりと「樺太の碑」という石碑も見つかる。樺太出身者で沖縄戦で犠牲となった2,000名余りを慰霊するものとして、1987年に建立されている。

4-4-5. 沖縄放送局戦歿職員慰霊碑

日本放送協会は、1942年1月に沖縄での放送をスタートさせたが、1945年3月、米軍の攻撃により送信機能を失っている。その後職員30人余りのうち8人が死亡している。戦後、8人の戦没者の慰霊のために、慰霊碑が建立され、さらに1995年に全面改修が行われている。

戦前の沖縄放送局については、1971年にNHK総合放送文化研究所放送史編修室が作成した「放送史料集 沖縄放送局」という史料が残されており、NHK放送文化研究所の「放送研究と調査」2013年1月号の中で、内容が紹介されている²¹⁾。

北海道、東京など、いくつかの都府県の慰霊塔は、平和祈念公園に隣接する地域に設置されている。

沖縄県の調査では、現在県内で確認されている県内慰霊塔（碑）は442基（糸満市内に124基）あり、そのすべてが沖縄戦に関連するものと定義しているわけではないが、かなりの割合が沖縄戦に関連するものと思われる。県の報告書は、定期的にアップデートされており、平成30年度の調査が本校執筆時には最新の報告書となっている²²⁾。これによると、地方自治体等が管理するものを除いた慰霊碑（塔）の場合、25%にあたる75基に、ひび割れその他の問題が発生しているほか、高齢化等管理上の問題が生じているものも多い。ただ現状としては、定期的な保全活動が行われており、管理者不明の慰霊碑（塔）を除く380基については、「管理をそのまま続けたい」という回答が96.8%となっているほか、定期的な清掃が96.8%、慰霊祭が77.4%の慰霊碑（塔）で行われている。

4-5. 魂魄の塔

糸満市米須地区にある魂魄の塔は、激戦地であった米須地区に散乱して

いた遺骨を拾い集めて収めた慰霊碑で、終戦後に建てられた最も早い慰霊碑とされている。この慰霊碑を作ったのは、当時この地域に収容されていた旧真和志村の人々で、米軍と交渉して許可を得て遺骨を収集し、それらを収容して慰霊する慰霊塔を建てたという。合祀された遺骨の殆どは、国立沖縄戦没者墓苑に移されたが、現在も6月23日の沖縄慰霊の日などに、人々が多く訪れる場所である。

塔の横には、遺骨収集と塔の建立に尽力したという、当時真和志村長であった金城和信の胸像が建てられている（写真8、9）。

魂魄の塔の近くには、「有川中将以下将兵自決の壕」という慰霊碑が建てられて、近くに部隊が潜伏していた壕がそのまま残されている。慰霊碑は1981年に建てられている。



写真8 魂魄の塔



写真9 金城和信胸像

4-6. 嘉数高台公園

宜野湾市嘉数にあるこの公園は、沖縄戦序盤の激戦地の一つである嘉数高台にある。現在は、子供向け遊具なども設置されており、市民の憩いの場となっているが、階段をのぼると、当時用いられたトーチカが保存されているほか、嘉数の塔、京都の塔、島根の兵奮戦之地、青丘之塔（韓民族出身兵士慰霊塔）も設置されている。

また同時に、展望台からは、普天間飛行場が一望できるため、カメラをもって撮影するメディア関係者等に遭遇することも多い。2022年9月に筆者が訪問した際にも、撮影を行っているカメラマンが長時間座っている様子が見られた。

2018年には、公益財団法人イオン環境財団により、台風により倒木した公園内に1,000本の植樹が行われており、「イオン平和の森」と書かれた石碑が設置されている。

4-7. 米軍兵士慰霊碑

石垣市富崎にある「米軍飛行士慰霊碑」は、日本軍兵士に処刑された米兵捕虜を慰霊するものとして、2001年に建立されたものである²³⁾。1945年4月15日、日本軍の対空砲火で撃墜された米軍機から、3名の米軍飛行士がパラシュート降下してきた。彼らを捕えた海軍関係者は、台湾や沖縄本島に捕虜を輸送する手段が失われていたことから処刑を決断し、暴行を加えた上で、軍刀あるいは銃剣で殺害した。戦後、関係者はBC級戦犯として横浜裁判で裁かれ、第一審で42人に死刑判決が下されたが、その後の助命嘆願運動、二度の再審を経て、7名が死刑となっている。

4-8. 忘勿石の碑

「沖縄戦」という言葉で、多くの人々が戦場として想起するのは、沖縄本島であろう。しかし実際には、慶良間列島、伊江島、大東諸島、津堅島などにも、戦闘の記録が残っている。

米軍との地上戦とはやや性質を異にするが、離島で大きな犠牲を出したのが、八重山諸島における「戦争マラリア」²⁴⁾であり、この「戦争マラリア」の犠牲者を弔う慰霊碑として知られているのが、西表島南風見田にある忘勿石の碑である。西表島南風見田は、当時マラリアの有病地域であることがわかっていたが、1945年4月、陸軍の派遣した残置諜者の命令により、波照間島の住民が強制避難させられ、住民1,590人のうち1,587人がマラリアに罹患、477人が死亡したとされている。

忘勿石の碑は、これらの犠牲者を弔うために、1992年、かつて波照間島民が避難していた西表島南風見田に建立された。忘勿石の由来は、避難当時波照間国民学校校長であった識名信升が、海岸の左岸に「忘勿石 ハテルマ シキナ」と刻んだのが由来とされており、この文言の模刻と、識名の胸像が設置されている（写真10、11）。



写真10 「忘勿石 ハテルマ シキナ」
の文字



写真11 忘勿石の碑

西表島は現在、イリオモテヤマネコが生息する自然豊かな島として、カヌー・トレッキング・ダイビングでも知られているが、忘勿石の碑はあまり注目されていない。西表島には、映画「緑の牢獄」（監督 黄インイク）²⁵⁾が描いた西表炭鉱があり、かつて台湾から渡った労働者が、過酷な労働に従事していたこともわかっている。

マラリア有病地域への強制避難は、八重山各地で起こっており、石垣市新栄町にある八重山平和祈念館には、これに関する常設展示がある²⁶⁾。

5. 沖縄の「戦後」

日本の「終戦」を象徴する日付が8月15日であるとすれば、沖縄の戦争を象徴する日付は、沖縄戦の「組織的戦闘」が終わったとされる、沖縄慰霊の日、6月23日となる。もちろん、この日、沖縄が「終戦」になったわけではないということもよく知られているところである。このほか、2022年に50年を迎える、沖縄の本土復帰の日である5月15日も、沖縄の「戦後」にとっては節目と言える。もう一つ、1952年4月28日の「対日平和条約」の発効は、沖縄の米軍支配の継続の根拠となり、沖縄が本土と切り離された「屈辱の日」として、長く沖縄の人々に記憶されることになった²⁷⁾。

2021年6月の沖縄タイムスとYahooによるインターネット調査では、全国からの回答者2,000人のうち、75.5%、1,509人が慰霊の日を「知らなかった」と回答している²⁸⁾。この調査は、「沖縄戦」に関するもので、「戦後」に関わるものではないが、沖縄への関心の低さを推測させるもののように見える。

一方、本土復帰50年を迎えた沖縄にも複雑な様相がある。朝日新聞が2022年6月に特集した「ただいま、沖縄～復帰50年の街を歩く～」では、報道各社が特集を組んでいる本土復帰50年について、沖縄の街の人々の関心がさほど盛り上がっていない様子を、テキストとポッドキャストで伝えている²⁹⁾。そこから、「核抜き本土並み」を実現できないまま、今に至っている沖縄の状況に対して、両手を上げて喜べない心情を読み取ることもできるだろうが、復帰から時間がたち、関心が弱まったという要因など、複合的な原因を見出すこともできるであろう。

ここでは、米軍統治の時代から今に至る1945年以後の「戦後」の事象について、「沖縄戦」ほどのインパクトを本土の人々に与えるのは難しいとしても、それぞれの現状を確認しつつ、その可能性を探ってみたい。

5-1. 瀬長亀次郎記念館「不屈館」

米軍統治下で那覇市長や衆議院議員を務めた瀬長亀次郎の生涯について展示した記念館が、那覇市若狭にある「不屈館」である³⁰⁾。那覇市内中心部、波の上ビーチから数百メートルの位置に、2013年に開館している。瀬長亀次郎は、1907年豊見城村（現在の豊見城市）生まれ、戦前から社会主義運動に身を投じ、戦後は、名護町助役、ジャーナリストとして活躍、1946年にはうるま新報（現在の琉球新報の前身）の社長をつとめている。その後立法院議員、那覇市長となり、米軍政府の度重なる「妨害」と戦い続けた「不屈」の人として知られている。本土復帰前に行われた国政選挙で衆議院議員となり、復帰後も日本共産党に所属して衆議院議員を7期つとめた。

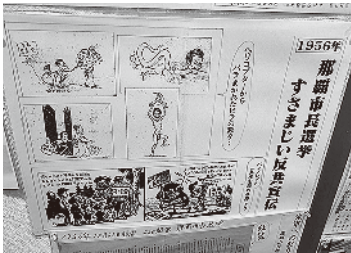


写真12 瀬長を共産主義者として滑稽に描いた風刺画

館内には、1952年4月の琉球政府創立式典において、瀬長が米軍への宣誓を拒否した事件のほか、那覇人民党事件、那覇市長選における反共宣伝（写真12）など、瀬長亀次郎の生涯がよく理解できる内容となっている。本土復帰やその後の基地問題については、保守・革新のいずれの立場の政治家も、高い関心を持ってきたのが沖縄の政治状況であり、瀬長の足跡をたどるだけで全体状況がみえるかどうかはわからない。ただ、「不屈」の精神で抵抗を続けた革新政治家、瀬長亀次郎の生涯から、沖縄の戦後史の一断面を読み取ることはできるだろう。

5-2. 海洋博公園

沖縄県北部本部町にある海洋博公園は、首里城公園とならんで、国営沖縄記念公園の一部となっている。1975年に開催された沖縄国際海洋博覧会によって開発された一帯を、北部地区の観光の拠点として整備したものである。1976年8月に公園として開園し、2018年10月に来場者1億人を達成している³¹⁾。71.8haの公園内には、オーシャンックゾーン、沖縄文化・センターゾーン、熱帯亜熱帯環境ゾーンの3つのゾーンがあり、各ゾーン内にそれぞれ複数の施設が点在している。報道によると、2017年の海洋博公園の来場者約500万人のうち、沖縄美ら海水族館の入館者は約378万4千人、76%を占めており、海洋文化館の約12万人、熱帯ドリームセンターの約13万8千人との差は非常に大きくなっている³²⁾。

海洋博は、本土復帰後の沖縄に多額の公共投資を行う一大プロジェクト

に発展し、空港・高速道路を始めとした交通インフラが整備されたイベントで、観光の観点でいえば、「慰霊」から「リゾート」に沖縄観光の目的・イメージが転換するきっかけとなったとされている。ただし、急速な開発による地価の高騰、環境破壊が指摘された一方で、入場者数は思ったほどの伸びを見せず、会期後はさらに観光客が激減し、「海洋博不況」を招いたと言われている。

海洋博開催当時の様子については、海洋博公園内の施設、海洋文化館内で展示が行われている（2022年9月確認）。この中では、会期後の「海洋博不況」といった事象にも触れつつ、1977年以降の観光キャンペーンが成功したことが述べられている。施設については、海洋博当時、未来の会場都市という触れ込みで、会場から200メートル沖合に作られた「アクアポリス」が、2000年に外国企業に売却され、上海に曳航されたという記述があった（写真13）。

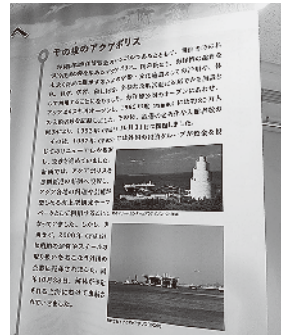


写真13 その後のアクアポリス

5-3. 仲よし地蔵

1959年6月30日、うるま市石川（当時石川市）の宮森小学校に、米軍ジェット機が墜落した。この事故の犠牲者を弔うものとして、宮森小学校内に設置されているのが、仲よし地蔵である。

この事故では、児童を含む18人が死亡、210人が重軽傷を負う大惨事となり、戦後沖縄で最大の米軍機事故とされている。現在に続く基地負担を象徴する事件とも言える。2010年には、石川・宮森630会が発足、その後NPOとして、事件を語り継ぐ活動を行っている。

デジタルアーカイブとしては、沖縄県公文書館が、事故直後の映像を所蔵し一部公開している³³⁾ほか、NHK戦争証言アーカイブスの中でも、2009年4月放送の「うるま市 宮森小事故から50年」を公開している³⁴⁾。2022年8月、日本テレビ系列で放送されたドキュメンタリー「オキナワ1967“沖縄18歳の発言”から55年」（NNNドキュメント、制作／日本テレビ）では、1967年当時の高校生が、自らが友人を失ったこの事件のことを思い出して、感極まる様子が紹介されている³⁵⁾。

5-4. 730記念碑

1978年7月30日、沖縄県では、自動車右側通行から左側通行に変更さ

れた。本土復帰に伴って、日本の交通法規に合わせて変更した形だが、実際には復帰から6年経ってからの措置となった。この日、短時間で左側通行に変更したこと、その後も多少の混乱が見られたことなど、さまざまな理由により、この出来事は「730」「ななさんまる」と呼ばれて、記録が残されている。当時「730」を広く周知するためのキャンペーンは広く行われ、「人は右、車は左」という標語が各地に張り出された。またこの大事業を記録した、短編映画「沖縄730 道の記録」という映画も沖縄県によって制作されている³⁶⁾。

石垣市の市内中心部には、「730交差点」と呼ばれる交差点があり、この近くには730記念碑が建てられている³⁷⁾。このほか、沖縄本島でも、沖縄県庁の敷地内に、730記念碑が設置されている。

おわりに

本土復帰から50年経った2022年、世論調査の報道では、依然「沖縄と本土のギャップ」という見出しが使われている³⁸⁾。共同通信の調査では、「基地をどうするか」については、全国調査、沖縄調査ともに「大きく減らす」という回答が過半数だが、「現状のままでよい」が、沖縄調査では26%だったのに対し、全国調査では40%であったという。また経済格差についても認識の差は大きく、沖縄と他の都道府県との間に格差が「あると思う」と回答した人は、沖縄では93%であるのに対して、全国調査では、「思う」が53%、「思わない」が47%という結果になっている。琉球処分、沖縄戦、米軍統治、基地負担と続いてきた沖縄の歩みは、時代の変化の中で関心が低下し、本土との格差についても47都道府県の中での相対的な差異とみなされているようにも見える。

沖縄のダークツーリズムは、慰霊観光から始まり、「南国リゾート」へのイメージ定着後も、修学旅行を中心とした「平和学習」の需要に支えられ、一定の関心を集めてきた。それにもかかわらず、本土の人々との間にギャップが生まれるというのは、沖縄の歴史についての関心が、高まっていないからだとも考えられる。沖縄戦に関連する無数の慰霊碑（塔）、戦争遺跡、史料館など、関連する施設は多数ある中で、これらの人々が知り、訪れつつ、沖縄についての関心を深めていくことはできるのか。これら重層的な遺構・施設を相互に連携させ、可視化するとともに、「南国リゾート」のイメージでやってきた観光客に対しても、気軽に立ち寄ってもらえるような動線の設計が重要になってくるであろう。

※本研究はJSPS科学研究費補助金（科研費）18K12000の助成を受けたものである。

註

- 1) 「復帰50年」琉球新報デジタル
 <<https://ryukyushimpo.jp/tag/復帰50年>>（2022年9月29日確認）
 「沖縄の生活史～語り、聞く復帰50年」（沖縄タイムス）
 <<https://www.okinawatimes.co.jp/category/okinawanoseikatushi>>（2022年9月29日確認）
- 2) 「特集 つなぐ 未来へ」（NHK沖縄放送局）
 <<https://www.nhk.or.jp/okinawa/hondofukki50/>>（2022年9月29日確認）
- 3) 「沖縄民放からみる『本土復帰50年』1 番組アンケートの結果から ラジオ編」（民放online）<<https://minpo.online/article/content-11.html>>（2022年9月29日確認）
 「沖縄民放からみる『本土復帰50年』2 番組アンケートの結果から テレビ編」（民放online）<<https://minpo.online/article/50-1.html>>（2022年9月29日確認）
- 4) 「復帰50の物語 第1話 見つめ直す原点」（QAB）
 <<https://www.qab.co.jp/news/20220106146174.html>>（2022年9月29日確認）
 「沖縄本土復帰50年シリーズ「HOPE50」（RBC琉球放送）
 <https://www.rbc.co.jp/tv/tv_program/hope50-presented-by-nttwestjapan/>（2022年9月29日確認）
 「復帰50年未来へ オキナワ・沖縄・OKINAWA」（OTV沖縄テレビ放送）
 <<https://www.otv.co.jp/information/info/fukiwosiru/>>
- 5) 「1879年3月27日 『沖縄県』の設置」（沖縄県公文書館）
 <https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4631>（2022年9月30日確認）
 これらの一連の流れに、「琉球処分」という用語が用いられている点について、前田勇樹「『琉球処分』の百四十年」前田勇樹ほか編「つながる沖縄近現代史—沖縄のいまを考えるための十五章と二十のコラム」（ボーダーインク、2021年）、33-34頁。
- 6) 小熊英二「<日本人>の境界」（新曜社、1998年）、18-34頁。
- 7) 「ペリー提督上陸記念碑」（那覇市観光資源データベース）
 <<https://www.naha-contentsdb.jp/spot/506>>（2022年9月30日確認）
 前田勇樹「ペリーが琉球にやってきた時代」前田勇樹ほか編前掲書、16-25頁。
- 8) 「臺灣遭害者之墓」（那覇市観光資源データベース）
 <<https://www.naha-contentsdb.jp/spot/418>>（2022年9月29日確認）
 平野久美子「牡丹社事件と『水に流す』知恵」（nippon.com）
 <<https://www.nippon.com/ja/column/g00470/>>（2022年9月29日確認）
 辺野喜、陳宝来「宮古船台湾遭難から台湾出兵までの3年間 進む『世紀の大和解』」
 <<https://hubokinawa.jp/archives/16293/2>>（2022年9月29日確認）
- 9) 「人頭税石」（沖縄観光情報WEBサイト おきなわ物語）
 <<https://www.okinawastory.jp/spot/20340903>>（2022年9月30日確認）
- 10) 「中村十作記念館」（上越市ホームページ）
 <<https://www.city.joetsu.niigata.jp/soshiki/itakura-ku/itakura-ss-08.html>>（2022年9月30日確認）
- 11) 「移民の世紀」（琉球文化アーカイブ／沖縄県立総合教育センター）

- <<http://rca.open.ed.jp/city-2001/emigration/index.html>> (2022年9月29日確認)
- 12) 前田勇樹「甘いけど苦い、黒糖と沖縄近代」前田勇樹ほか編前掲書、43-44頁。2022年5月の本土復帰50年記念番組として、NHKは、1979年放送のNHK特集「わが沖縄～具志堅用高とその一族～」を放送した。この中では、ボクシング世界チャンピオンとなった具志堅用高氏の一族が、琉球処分以後にたどった歩みを紹介しており、その中で、多くの親族が南洋群島に移住し、戦闘に巻き込まれた経験を語っている。このほか、テニアン島での戦いについては、ETV特集「“玉砕”の島を生きて～テニアン島日本人移民の記録～」(2021年8月28日放送)がある。
- 13) 「移民資料コーナーについて」(沖縄県立図書館)
<<https://www.library.pref.okinawa.jp/about-okinawa/cat2/post-7.html>>
(2022年9月29日確認)
- 14) 「慶良間チージ」(那覇市観光資源データベース)
<<https://www.naha-contentsdatab.jp/spot/461>> (2022年9月29日確認)
- 15) 「1944年8月22日 学童疎開船『対馬丸』が撃沈される」(沖縄県公文書館)
<https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4745> (2022年9月30日確認)
- 16) 対馬丸記念館<<http://tsushimamaru.or.jp/>> (2022年9月30日確認)
- 17) ひめゆりの塔が設置されて数年後、1952年後の映像が、沖縄アーカイブ研究所によってデジタル化されて公開されている。「ひめゆりの塔 慰霊祭(1952年)」(沖縄アーカイブ研究所) <<https://okinawa-archives-labo.com/?p=901>> (2022年9月30日確認)
- 18) 「“ひめゆりの声”を届けたい ～戦後75年 生まれ変わる資料館～」
(NHK沖縄放送局 2020年6月26日放送)
- 19) 「皇太子さま沖縄へ」(NHK放送史) <https://www2.nhk.or.jp/archives/tv60bin/detail/index.cgi?das_id=D0009030136_00000> (2022年9月30日確認)
- 20) 「陸上自衛隊、未明の集団参拝は実施されず 日本軍の司令官らをまつる『黎明之塔』」
沖縄タイムス+プラス<<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/979686>>
(2022年9月29日確認)
- 21) 宮川大介「『放送史料集 沖縄放送局』～戦火の中に消えた放送～」放送研究と調査。
2013年1月号、74-75頁。
- 22) 沖縄県「県内慰霊塔(碑)管理状況等実態調査結果の公表について」
<<https://www.pref.okinawa.lg.jp/site/kodomo/hogoengo/engo/ireitouchousa.html>>
(2022年9月29日確認)
- 23) 大田静男『八重山の戦争』(南山舎、1996年)、239-242頁。
- 24) 波照間の戦争マラリアについて取材したドキュメンタリー映画として、2018年公開の「沖縄スパイ戦史」(監督:三上智恵、大矢英代)がある。関連の著作として、大矢英代「沖縄『戦争マラリア』—強制疎開死3600人の真相に迫る」(あけび書房、2020年)。
- 25) 映画『緑の牢獄』<<https://green-jail.com/>> (2022年10月21日確認)。関連の著作として、黄インイク「緑の牢獄 沖縄西表炭坑に眠る台湾の記憶」(五月書房新社、2021年)。
- 26) 八重山平和祈念館<<https://www.pref.okinawa.jp/yaeyama-peace-museum/index.html>>
(2022年9月30日確認)
- 27) 「1952年4月28日『対日平和条約』発効」(沖縄県公文書館)
<https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4561> (2022年9月30日確認)
- 28) 「全国75.5%の人たちが知らなかった沖縄の『慰霊の日』きょう沖縄戦から76年」
(沖縄タイムス+プラス) <<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/774415>>
(2022年9月30日確認)

- 29) 連載「ただいま、沖縄 ～復帰50年の街を歩く～」(朝日新聞デジタル)
 <<https://www.asahi.com/rensai/list.html?id=1534>> (2022年9月30日確認)
- 30) 不屈館<<http://senaga-kamejiro.com/index.html>> (2022年9月28日確認)
- 31) 「入園者1億人達成」(海洋博公園 Official Site)
 <<https://oki-park.jp/kaiyohaku/newsrelease/detail/4224>> (2022年9月28日確認)
- 32) 「美ら海水族館オープンで入場者急増 沖縄観光の代名詞・海洋博公園」
 (琉球新報デジタル) <<https://ryukyushimpo.jp/news/entry-813606.html>>
 (2022年9月28日確認)
- 33) 「1959年6月30日 宮森小学校ジェット機墜落事故(石川ジェット機事件)」
 (沖縄県公文書館) <https://www.archives.pref.okinawa.jp/news/that_day/4606>
 (2022年9月30日確認)
- 34) 「うるま市 宮森小事故から50年【放送日2009.4.8】」(NHK戦争証言アーカイブス)
 <https://www2.nhk.or.jp/archives/shogonarchives/okinawa/senseki/detail.cgi?das_id=D0001860040_00000> (2022年9月30日確認)
- 35) 「オキナワ1967“沖縄18歳の発言”から55年」(NNNドキュメント)
 <<https://www.ntv.co.jp/document/backnumber/articles/1894wll0368aix39z0i3.html>>
 (2022年9月30日確認)
 この番組では、1967年8月放送の「ノンフィクション劇場『われら日本人 沖縄18歳の発言』を紹介しつつ、現在70代となった当時の高校生たちに再びインタビューし、変わらない沖縄の現状を描き出している。
- 36) 「沖縄730道の記録」(沖縄県 YouTubeチャンネル)
 <<https://www.youtube.com/watch?v=xklmxmgaFWA>> (2022年9月28日確認)
- 37) 「『730交差点』が石垣島にあるワケは？ きっかけは警察官がデザインした記念碑」
 (沖縄タイムス+プラス) <<https://www.okinawatimes.co.jp/articles/-/936545>>
 (2022年9月30日確認)
- 38) 「『沖縄』と『全国』の間に横たわる深刻なギャップ 日本復帰50年、計4500人を対象にした世論調査で分かったこと」(47NEWS) <<https://news.yahoo.co.jp/articles/6e02058eb6999a62514afce29be5742e8da444f6>> (2022年9月30日確認)